

なかま新聞

なかま新聞
編集 新聞部員
姫路市北条宮の町
215番地
TEL079-287-1025



芸術の秋

昔から、秋には様々な形容詞がつけられてきました。「食欲の秋」「スポーツの秋」「読書の秋」「行楽の秋」、そして「芸術の秋」。

私の趣味の一つに「美術館巡り」というのがあります。中学生の頃、級友からもらった数枚の絵をきっかけに美術品に興味を持ち始め、以来私は「小さな美術品」は収集、「大きな美術品」は鑑賞の対象と考へて、私なりに芸術に親しんできました。

先日、次のような話をラジオで聞きました。画家のピカソが道端でスケッチをしていたところ、そこを通りがかった婦人があまりに見事な出来栄え

に感動して、自分のデッサンを依頼したそうです。ピカソは快諾し、ものの三分で書き上げました。その作品の見事な出来栄えに婦人も大喜びで金額をたずねました。ピカソは、五千フラン(約四十万円)要求しました。それを聞いて婦人は、顔を真っ赤にして怒り、言いました。『この絵は確かによくできています。しかし、わずか三分で描いた絵が、五千フランは高すぎます』と。ピカソは涼しい顔で「絵を気に入って頂きありがとうございます。確かに私はこの絵を三分で描きました。それは普通の人には不可能なことです。そのため私は、四十年という歳月を費やしたのです。これはその成果です」と答えたそうです。

私たちは、様々な芸術作品を鑑賞する時、しばしば自分の好み、他の作品との比較、著名な評論家の評価、作品に使われているテクニックとあります。しかし、一つの作品が生み出されるまでに費やされた作家の人生そのものをおもんばか

ることはあまりありません。

どんなにつまらない作品であつても、その作家の過去の人生の一つの集積であることは間違いないことで、その過去に思いを馳せてみることで、受ける印象もまた深みを帯びてくることでしょう。そして、そのように作家の過去に思いを馳せること、そのものが一つの「芸術」と呼べる行為なのかもしれません。あけびの仲間の一つ一つの作品にも、そのような目を向けると、その作品に新しい輝きを見いだすことができるかもしれません。

長谷川 和宏



写真：森澤 博



ティータイム

十一月も半ばになり、秋本番の今日この頃、思い返すに、今年の夏ほど長く大変さを実感した年はなかったように思いますが、これも歳のせいでしょうか。皆さま方は、如何お過ごしになられたでしょうか。

私の今一番の悩みは声が出にくいことで、ついつい皆様の会話から外れようとしてしまいます。そんな私の気持ちを察して、「あけび」では、落ちこまないよう湯を入れて貰いながら、暖かく支えられています。本当に有難いことです。

通所者一人一人の抱えている悩みは違いますが、支え合う雰囲気作りに取り組んでいただくスタッフの方々の心遣いにも感謝の気持ちで一杯です。

仲間の皆様、「あけび」として我々にとっての憩いの場をこれからも大事にして、気持ちを明るく前向きに頑張ろうではありませんか。

岩村 和雄

仲間の声

奥野 ヨシ子

この度、予期せぬ病気になり、人生の終盤がくるってしまいました。だが、あけびの皆さんが優しく親切に接して下さる事が、ありがたいと思っております。残りの人生、命ある限り大切に生きていきたいと思えます。

山田 重子

あけびの実で久しぶりに社交ダンスをさせていただくチャンスがあつて嬉しかったです。あけびの仲間の皆さんとも、また一緒にダンスができれば楽しいだろうなと思います。

福永 正世

この夏、孫が「チャレンジ・アイルランド」NPO法人兵庫県生涯学習センターが主催する無人島一週間自給自足生活に参加したので。持参の食糧は、米と野菜と鶏だけで、魚や貝などは各自で確保し、電気、ガス、水道の無いところでの食事の準備。バスやトイ



レもありません。ですが、参加者は話し合つて役割分担を決め、協力し合つて窮乏生活に挑戦しようです。でも、最後の日になつて、持参した鶏を処理して食べるかどうかについて、「命に係わる話し合い」を重ねたようです。多感な時期の子ども達だからこそ、熱く語り合えたことでしょう。

さて、孫がこの耐乏体験で、少しでも遅くなつてくれることを願うと同時に、私も孫に負けないように、日々チャレンジ精神で生活していこうと心に決めました。

大西 正

「あけび」を利用するようになったのは、今年の三月二十六日でした。ですが、私はそれ以前に、岩佐氏と共に「友の会」に入会し、乞われて「友の会姫路ブロック」の副代表に就いていたのです。

最近ようやく利用者の皆さんや職員の方達の顔と名前が覚えられるようになりました。色々なハビリが企画され、中でも、ボーリング大会が最高でした。「なかま新聞」の優れたセンスに感心しています。今後も、仲間同士明るく楽しく行動しようと思っております。

木下 素子

「午後、揖保川の河川敷で、まつたりした時間を過こしてみませんか」とのスタッフSさんの提案に、午前中の体操の疲れもあり、それに強い日差しの中へ入るのが嫌で、「あけび」でゆっくり過こしたいというのが、私の本音でした。が、昼食後、私は車の中に居たのです。到着したそこには、やさしく迎える大きな柳の木陰がありました。ブルーシートが敷かれ、クッションや寒さ除けの毛布などが用意されていました。ブルーシートの真ん中に、皆で頭を寄せて放射線状に寝ころび、体を思い切り伸ばし、空を見ると初秋の空は高く澄んで、白い雲が静かに浮かんでいました。いつの間

か、心も体も自然と一つになり、安らぎが全身を包んでいました。仲間たちと一緒にだということも大きな安心感になったことに気づき、絆の不思議さを感じました。その折の熱いコーヒーやお菓子など、細やかな心配りに、そして亦、この至福のひとつを留意して下さったスタッフに感謝し、加えてこのひとときが明日への活力となりますよう願っております。

私の孫自慢

…夫は私おばちゃんだったんです…

職員の和田です。隠していましたが、生後半年の孫がいます。名前は旬です。私もこれから堂々と孫自慢できます！

平成二十四年四月十七日生れ

